

翻訳を終えて

大西 秀 尚

個人的な話で恐縮ですが、私が韓国の円光大学大学院で韓国近代民衆宗教史を学んでいたとき、当時担当の朴孟洙教授から頂いた『開闢資料集1』の巻頭にあったのが「ハンサリム宣言」です。密度の濃い韓国語で書かれたその文は、当時の私の語学力と知識ではとても手に負えず、最後まで読みきることさえ困難であった。韓国近代民衆宗教を貫くテーマの一つである「開闢」思想を理解するためには、ぜひ突破したく、再三挑戦したが歯が立たなかつた。その後再び「宣言」に出会ったのが昨年、韓国の「東学」について本格的に学び始める中、関連書籍が出版されたことを知ったときだ。とりあえず朴孟洙教授に連絡したところ早速『죽임의 문명에서 살림의 문명으로』を送って頂き、「宣言」と共に二部構成になった後半部、「ハンサリム宣言再読」から読み始めた。比較的平易な韓国語で解説しその現代的意義まで探ろうとした文章は、永らく疎遠になっていた「ハンサリム宣言」を身近にしてくれるものに思われた。

「ハンサリム宣言再読」も、「ハンサリム社会を希望する」と「再びハンサリムの道を問う」に分かれている。前者は主として「宣言」そのものを中心に、成立の時代背景、成立過程、思想的背景などと共に、「宣言」の構成と内容、運動的課題などを今日的な視点も交えて平易に解説している。他方後者は「宣言」発表から二〇年後の今日的時点に立って、「ハンサリム宣言」が提起し

ている問題の現代的意味と運動的課題を考察しようとして試みたものだ。

私の場合何よりも前者の助けを借りて、東学思想と「宣言」との関連や「宣言」の全体像が次第に把握できるようになったと言える。それは別の意味で、東学思想の現代的意味の理解に通じることにもなる。特に東学が提起する「後天開闢」が、たんに成立当時の課題であつただけでなく、まさに「殺生の文明からサリムの文明」へと転換する、現代を生きるわれわれにとっての思想的課題でもあることが理解できたとき、東学の他の基本概念である「侍天主」・「輔国安民」・「不然其然」などが生命思想の現代的な観点から新たに蘇る思いであつた。

もちろん「ハンサリム宣言」は東学のみではなく、現代の新科学やヨーロッパの環境運動からの深い思想的影響もある。そうした哲学的・思想的基盤の上に、韓国の民主化運動の試練の中から創造された「ハンサリム宣言」は、現代の日本社会に生きるわれわれにも多くの深い示唆を与えてくれる、というのが翻訳後の正直な実感だ。

昨年三・一一以後、われわれの生き方や文明そのものについて根本的な見直しを迫られている現代日本人にとって、韓国と日本の歴史的・文化的・社会的な相違を超えて、「ハンサリム宣言」が提起する生命思想は豊かな水を湛えた思想的水源であると思われる。拙訳の関係もあり一見取りつきにくい表現が多いが、日本の読者に広く読まれて議論されることを願ってやみません。